

レーニン「帝国主義論」の視角の確立過程

田中, 素香

<https://doi.org/10.15017/3000000>

出版情報：経済論究. 30, pp.19-44, 1973-06-10. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：



レーニン『帝国主義論』の 視角の確立過程

田 中 素 香

はじめに

第一節 帝国主義研究の出発

第二節 帝国主義認識の視角の確立

第三節 帝国主義認識の視角と段階認識

小 括

はじめに

第二次大戦後、社会主義世界体制の成立・発展と、それを背景とする民族解放闘争の勝利をつうじて、西欧帝国主義諸国の植民地制度は、50年代後半から60年代前半までの時期に最終的に崩壊し、直接の国家的・法律的な植民地領有の時代は終幕を下ろした。アメリカの大企業が「多国籍企業」への道に踏み出し、E E Cが成立、発展を開始するのも同じ時期であり、これら戦後世界経済の新たな諸現象とその影響は、改めてレーニン『帝国主義論』の再検討へ導いている。

レーニンは『帝国主義論』第七章で、周知のように帝国主義の五つの基本的標識を与えている。「(1)生産と資本の集積。これが高度の発展段階に達して、経済生活で決定的な役割を演じている独占体をつくりだすまでになったこと。(2)銀行資本が産業資本と融合し、この「金融資本」を基礎として金融寡頭制がつくりだされたこと。(3)商品輸出とは区別される資本輸出が、とくに重要な意義を獲得していること。(4)資本家の国際的独占団体が形成されて、世界を分割していること。(5)資本主義的最強国による地球の領土的分割が完了していること⁽¹⁾」。これを順に帝国主義の第一標識～第五標識とよぶことにしよう。第三標

識（資本輸出）に関しては、その新たな形態として多国籍企業がとり上げられすでに多くの議論が積重ねられている⁽²⁾、第五標識に関しては、植民地制度の崩壊と関連して、「帝国主義の終末」論⁽³⁾と「新植民地主義」論⁽⁴⁾が現われている。これに対して第四標識（「国際的独占体のあいだでの世界の分割」）は、いくつかの例⁽⁵⁾を除いて問題にされていないように思われる。

世界経済分析への『帝国主義論』の適用に示されている上述の傾向は、『帝国主義論』解釈の傾向を反映している。従来の解釈のほとんどは、帝国主義を金融資本の植民地支配体制と同一視し、第五標識を様々の角度から重要視してきたのに反して、第四標識には、それを単なる事実の指摘とみるか、各国金融資本の力量をあらわす標識とみなすか、等々のニュアンスの差異はありながらきわめて軽い位置づけしか与えてこなかった。最近では、レーニンが第四標識を帝国主義の基本的な経済的特徴として説いたこと自体が誤まりであったとする見解すら現われている⁽⁶⁾。

しかしながら、第四標識を軽視または無視し、第三——第五標識の関連において帝国主義を把握しようとする理解は、ブルジョア的および小ブルジョア的な帝国主義観や、最高の水準でもヒルファディングを理論的指導者とした当時の社会民主主義派の帝国主義理解と同一線上にあるといわねばならない⁽⁷⁾。なぜならレーニン『帝国主義論』の構成上の主要な特徴の一つは、資本輸出から直ちに植民地獲得闘争を説かず、第四標識を両者のあいだに介在させたことにあるからである。第四標識をレーニンがいかに重視していたかは、ボルシェヴィキ党の綱領改正にさいしてこの標識を帝国主義の特徴づけから排除した同志ソコリニコフに対するレーニンの厳しい批判⁽⁸⁾からも知ることができる。『帝国主義論』のこの独自の構成は、レーニンの帝国主義認識の独自の視角をいあらわしている。それを正確に理解することは、『帝国主義論』を正しく評価し、マルクス経済学におけるその位置を確定するうえで不可欠である。

わが国における『帝国主義論』の研究は、それを経済学批判体系にどのようなように組入れるか⁽⁹⁾、あるいは「段階論」としてどのように再構成するか、という

視角から主としてなされている。のちに明らかにするように、これらの潮流はレーニンの帝国主義認識の視角と方法を正しく把握しえていず、そのために、第四標識の軽視または無視という結果が生じているように思われる。

このような『帝国主義論』研究上の欠陥を克服するという課題のほかに、戦後世界経済の新らしい諸現象が、閉鎖的排他的な「経済領域」という概念を陳腐化させ、多国籍企業やECなどに示される世界金融資本の新たな活動形態が生み出されているという歴史的事実は、第四標識の再検討を迫るもう一つの事情である⁽¹⁰⁾。

以上のような問題意識のもとに『帝国主義論』の視角と方法を、その独自性をなす第四標識に焦点をあわせて究明することが本稿の課題である。いうまでもなく『帝国主義論』の解釈だけが目的ではなく、植民地制度の崩壊等の世界経済の新らしい現象を主たる理由として『帝国主義論』を放棄する傾向⁽¹¹⁾、経済学批判体系という神棚に祀り上げて石女化しかねない傾向、これらに反対して、現代世界分析の基礎視角に『帝国主義論』が据えらるべきであると主張することに、本稿の主たる目的がある。

最後に構成についてふれておこう。第一節では帝国主義研究の出発点におけるレーニンの帝国主義認識の理論的性格を明らかにする。第二節では、ヒルファディング『金融資本論』の影響を克服して、レーニン独自の視角を確立する過程の解明が中心になる。第三節では、確立された帝国主義認識の視角と帝国主義を資本主義の特殊の段階と捉える段階認識との関連を明確にする。以上が本稿「『帝国主義論』の視角の確立過程」の内容である。次にこの研究を基礎に、『帝国主義論』における第四標識の位置づけと現代世界経済分析における方法上のその意義とを明らかにする。更にヒルファディング『金融資本論』が『帝国主義論』によっていかに克服されたかを解明する。紙数の制限のために後半部分は次稿に譲らねばならない。前半部分と後半部分とはともに単独論文の形式をとっているが、このまえがきで述べた目的は全体によって果される。

〔註〕

- (1) 『帝国主義論』, 大月版全集, 第22巻, 307—08ページ
- (2) マルクス経済学において, レーニンの資本輸出論を継承したものとして, たとえば奥村茂次「アメリカ巨大企業の対外進出と多国籍企業」(大阪市立大学研究所報「企業集団と産業支配」1972, 5, 所収)。レーニン段階との形態的差異(投下先, 業種等)を根拠にもはや『帝国主義論』では抱ええないとする主張は, 岩野茂道, 「多国籍企業と『帝国主義論』」(熊本商大論集, 33号, 1971, 4,)がある。
- (3) John Strachey, "The End of Empire", 1959, 関嘉彦他訳『帝国主義の終末』1962年。「帝国」の崩壊によって帝国主義の終幕が下りたとみる見解は, 日本でもたとえば, 富塚文太郎, 「帝国主義崩壊期の世界資本主義」(『現代日本資本主義講座』第3巻, 1966. 所収)。
- (4) たとえば岡倉古志郎他編『新植民地主義』1964年
- (5) 多国籍企業を『帝国主義論』の第四標識との関連で把握しようとする試みとして佐藤定幸, 「資本輸出の現代的形態と世界企業」, (『新マルクス経済学講座』第3巻, 1972, 所収), および, 同「多国籍企業の行動と論理」, (『経済研究』(一橋大) Vol. 23, No. 3, 1972, 7,) がある。また, 第四標識の重要性を, 戦後世界経済分析の方法との関連において提起した労作として, 木下悦二, 「戦後世界経済の一視角」, (『九州大学産業労働研究所報』, 第52・53号, 1971.3.) がある。本稿は, これらの諸論文に示唆を受けている。
- (6) 降旗節雄, 『帝国主義論の史的展開』, 1972, 230ページ, 渡辺寛, 「帝国主義論——その論理と実証」(2), (東北大学, 「経済学」, 第100号, 1971,) これらの見解はいずれも宇野理論の段階論の視角からのレーニン批判である。レーニンの視角への考慮が払われず, 一面的な批判にすぎない点については, 行論のなかで反批判を行う。
- (7) ブハーリンは, 国際カルテルを, 「資本の国際化」の実例として指摘したが, 帝国主義の理論化にさいしてはそれを組みこみえていない。N. ブハーリン, 『世界経済と帝国主義』, 1915年執筆, 1917年発行, (西田・佐藤共訳, 1970年。)
- (8) 「党綱領の改正によせて」, 大月版レーニン全集(以下「全集」とのみ記す)第26巻, 162—3ページ。
- (9) たとえば宇佐美・宇高・島編, 『マルクス経済学体系・Ⅲ, 帝国主義論』, 1966年なお, 『資本論』と『帝国主義論』との理論的関連如何という立場から, 日本における戦前以来の重要な帝国主義研究をとり上げ, 批判, 評価しようとする試みとして, 『帝国主義論の方法——諸理論の分析と展望』(同志社大学人文科学研究所, 『社会科学』別冊, 1969年。)がある。この研究でとり上げられている諸研究のうち, 宇野理論を除く他の3つの視角はニュアンスの違いはもちつつも経済学批判体系に『帝国主義論』を組み入れるか, その方向へ改変しようとしている。この研究の主宰者である入江節次郎氏らのグループも, 『帝国主義論』を改変して, 上向

法による独占段階の一般理論へ再構成せねばならないと主張している。しかしこの労作においてはこの視角が前提されているといえてよく、レーニンに即して『帝国主義論』の視角と方法を問い返す作業はなされていない。そのために、最近ではこのグループにおいては、『帝国主義論』は他の古典的帝国主義論と同様に、新たな帝国主義の一般理論構築のさいの一つの手がかり以上の位置づけは与えられておらず、むしろ『帝国主義論』が及ぼしたとされる既成のイメージからの転換が求められている、(入江節次郎,「帝国主義に関する古典的諸学説研究の意義」,「社会科学」Vol. IV, No. 2, 1971年, 2ページ)。本稿、次稿とにおいて『帝国主義論』がいかに『金融資本論』を克服したかを明らかにして、このグループへ問題提起をおこないたい。

- (10) 戦後における資本の対外膨張の分析をつうじて、国家的併合により形成される閉鎖的な経済領域への資本の膨張は、資本にとってコストのかかる好まれない方法であって、過渡的形態にすぎないとする主張がある。Robin Murray, "The Internationalization of Capital and the Nation State", (New Left Review, No. 67, May/June 1971. pp. 54—109)。マレイは、カウツキー・レーニン論争に言及しながら、第四標識の意義を認識しえないがために『帝国主義論』の視角を自らの分析方法としてとりこみえていない。

- (11) 富塚文太郎, 前掲論文。

第一節. 帝国主義研究の出発

帝国主義戦争の勃発から翌年四月までの時期は、バーゼル決議のスローガン「を理論的＝実践的に擁護し、日和見主義、社会排外主義と闘争すること」に、レーニンの主力がそそがれている。第二インタナショナルに結集していたヨーロッパの社会主義諸政党が自ら決議したバーゼル宣言——反戦、そして戦争の勃発後はその生み出す危機を内乱に転化しプロレタリア革命へ——を裏切って城内平和＝祖国擁護政策に転じたという事情によって、レーニンは、さらに進んでこれらの諸党の理論家によって提出されていた既存の帝国主義に関する諸理論を批判・克服し、マルクス主義左派の見地からこの新しい時代の革命の基礎となる理論の構築にまで進むことを自らの課題とせねばならなかった。第二インタナショナルの崩壊をめぐってひき起された諸潮流の離合集散の帰趨がはっきりした15年春に、レーニンは帝国主義の本格的な研究にとりかかっている⁽¹⁾。

戦前におけるレーニンの帝国主義への言及は、オーストリアのボスニア・ヘ

ルツェゴヴィナ併合、バルカン紛争等々の諸事件をめぐるなされているが、列強の植民地政策と併合政策を帝国主義と同一視する通俗的理解を出していない⁽²⁾。戦争勃発後もしばらくはこの理解を引き継いでいる。14年8月の「ブルジョア的、帝国主義的、王朝的戦争」⁽³⁾という戦争の性格規定が示すように、レーニンは帝国主義の時代に固有の諸条件が生み出した戦争として眼前の戦争を理解してはいなかった。15年2月の二つの論文、「よその旗をかかげて」と「ロシア社会民主党在外支部会議」では、上記の戦争規定からの前進がみられる。前者の論文では、戦争と革命の有無およびその時代の発展の主要な方向と内容を規定するのはどの階級かという『帝国主義論』とは異なる基準によってではあるが、帝国主義の時代を、資本主義の最高の発展段階と規定しているし、金融資本をこの時代の没落しつつある支配者として指摘している。後者の論文では、この新しい時代の特徴をなす諸条件——資本輸出、生産のカルテル化と経済生活の国際化、植民地政策によるほとんど地球全体の分割等々——が、戦争を生み出したと把握する地点にまで到達している⁽⁴⁾。上述の時代区分の基準によれば、1914年以降が帝国主義の時代とされ、1871—1914年は「平和な」資本主義の時代である。

レーニンは、しかしこの時期には、金融資本の概念規定を与えていないし、また上掲の戦争を生み出した諸条件のあいだの関連もつけていない。「平和な」資本主義の時代を帝国主義へ交替せしめた経済的要因も示されていない。要するに、体系的理論的な帝国主義の把握はなされておらず、多分に直観的である。これら二つの論文は、したがって、レーニンの本格的な帝国主義研究に先立つ一つの里程碑であり、その前提をなしていると評価するのが適当であろう。

実践的課題の遂行に不可欠な戦争の具体的＝歴史的評価を与え、他の諸課題（第二インターナショナルの崩壊をめぐる諸問題、民族問題、ロシアの労働運動の指導など）の明確で正しい位置づけを可能にするためには、さらに前進して理論的な帝国主義の認識をなすことが必要であった⁽⁵⁾。『帝国主義論』冒頭で

レーニンが明らかにしているように、当時の帝国主義研究の最高峰は、ホブソンとヒルファディングであった。レーニンはこの二人の著作の検討から研究を開始している。そのさい前者をカウツキー批判にとってとくに有益であると位置づけていた⁽⁶⁾のにたいして、『金融資本論』からは、それが解明した帝国主義の経済的根柢を構成する諸概念をひとまず受け入れて、帝国主義研究の出発点としている。研究の出発点において『金融資本論』が及ぼした強い影響を示す資料として、『帝国主義論ノート』の〈『金融資本論』からの抜粋とコメント〉の後に位置するレーニンの〔メモ〕、同じく『ノート』の帝国主義の第1プラン、および15年5月の論文「第二インタナショナルの崩壊」における帝国主義認識を指摘することができる。これらの資料について検討しよう。

〔メモ〕（全集③307—8ページ。）

金融資本＝産業を支配する銀行資本

〔＜金融資本＝銀行資本＞で十分ではないか？〕

三つのもっとも重要な契機：

{アメリカにお ける大会社}	一定の段階までの大資本の発展と成長…… 銀行の役割、(集積と社会化)。
(アメリカ とドイツ)	独占資本(競争が独占によってかわられるほど 一定の産業の大部分を把握)……
{表——とアル ゼンティンの例}	世界の分割……(植民地と勢力範囲)……

馬場宏二氏も指摘しているように⁽⁷⁾、〔メモ〕は、帝国主義の第1プランとの照応（金融資本概念および(1)～(3)の項目において）がみられる。

〔第1プラン〕（全集③, 86ページ。）

帝国主義＝

- (1) 銀行資本
- (2) 独占体(トラストその他)
- {(3) 世界の分割〔植民地〕
- {(4) 銀行(金融)資本の国家機構との同盟(結合, 融合)
- (5) 集積の最高段階

「第二インタナショナルの崩壊」におけるレーニンの帝国主義の把握は、〔第1プラン〕と符合している⁽⁸⁾。

「帝国主義とは有産階級のあらゆる層が金融資本に従属することと、五つないし六つの「大」国のあいだに世界が分割されることである⁽⁹⁾」

帝国主義という言葉は、それが使われ始めた1870年代には、イギリス本国と大英帝国とのあいだの連結を強めようとした人々の見解を叙述するために使われていたが、次第に領土膨張政策を意味するようになった⁽¹⁰⁾。20世紀初頭には、後者の意味で一般に理解されていたのである。ホブソンもヒルファディングもその理解を受け入れ、その上で、帝国主義の経済的根柢、階級的内容、その意義と帰結等を、それぞれ小ブルジョア的およびマルクス主義的な立場から究明したのである。ヒルファディングの帝国主義の理解は次のように要約する。帝国主義とは世界市場競争の激化に直面した金融資本が世界市場の諸領域を国家権力の政治的手段をつうじて国内市場に併合し、自らのために独占しようとする政策である⁽¹¹⁾。ヒルファディングの帝国主義の理解がレーニンに引き継がれていることは、引用文における帝国主義の把握——金融資本と大国による世界の分割との2つのモメントによる把握——、および〔第1プラン〕において世界の分割のさいの銀行（金融）資本と国家との同盟に特に一項目があげられていることから知ることができる。

次に個々の論点に立ち入ることにしよう。第一に注目されるのは、金融資本概念が未だ確立されていないことである。金融資本＝産業を支配する銀行資本というヒルファディングの規定にたいして、レーニンは〔メモ〕において「金融資本＝銀行資本で十分ではないか？」と自問し、〔第1プラン〕では「銀行（金融）資本」と、両者を同一視するような表現すらしている。『金融資本論』の叙述全体のなかでは独占体の役割を強調しながら、金融資本の概念規定にそれを取り込み得なかったヒルファディングの規定の一面的性格をレーニンは未だ克服しえていないのである。この段階では、したがって、〔第1プラン〕の銀行資本と独占体との関連も明確につけられているとは言えないし、ひ

いては帝国主義の認識そのものが未確立であることをも意味している。

このような限界をもちながらも、この時期にすでにレーニンはヒルファディングを上まわるいわば帝国主義認識の座標軸を獲得している。経済的、政治的等の側面における帝国主義の本質を眼前の戦争が開示していたという事情がここで重視されねばならない。

第一に重要なのは、1914年以降を帝国主義の時代、新たな戦争と革命の時代と捉え、この時代への移行の根本的な原因を明確にしようとするレーニンの強烈な志向である。この志向から生れたのがヒルファディングの金融資本の概念規定においては位置を与えられなかった「自由競争の止揚＝独占」の時代区分における重視であり、地球の領土的分割完了という事実への早くからの注目であった。

「それ（「平和な」資本主義の時代から帝国主義の時代への交替——引用者）は、自由競争が独占的資本家団体に席をゆずったこと、および地球全体が分割されてしまったことにもとづいている⁽¹²⁾。」

この時代認識が一方では帝国主義の経済的本質を独占へ見出す方向へ、他方で段階認識へと発展していくのである。

第二は、帝国主義を認識する方法の問題である。眼前の戦争が文字どおり列強の絡み合いのなかで世界の支配と再分割をめぐる闘われていることは、事実がこれを物語っており、そのことはどれか一つあるいは複数の国民経済を分析するのではなく、世界経済の総体を国際的相互関係において把握する方法を必要としていた。ヒルファディングが制限されていた「古典的国民経済学⁽¹³⁾」の方法から脱脚して世界経済に視角を定めねばならなかったのである⁽¹⁴⁾。一例として、時代認識においてレーニンが重視した地球の領土的分割完了という要因は国民経済の特徴としては捉えることができない⁽¹⁵⁾。この世界経済的視角はアルゼンティンという金融的従属国を世界の分割の総体の一部分として位置づけようとする志向を可能ならしめてもいる。

シュトゥットガルトやバーゼル、ケムニッツ等の大会で帝国主義に関する議論

を積重ね、そこでの決議の予言どおり勃発した戦争を眼前にした当時のマルクス派にとっては、金融資本——その概念の内容は『金融資本論』の説く水準を越えていない——と大国による世界の分割との二つのモメントでの帝国主義認識は、自明であったと言ってよいであろう。帝国主義戦争の具体的＝歴史的評価を行うこと、とりわけその階級的内容を明らかにすることを課題としていたレーニンには、このいわば常識的な認識では不十分であった。これら二本の座標軸——世界経済的視角と時代認識における独占の重視——は、研究の出発点における帝国主義認識を克服し、レーニン独自の帝国主義認識の確立を保証する方法上の要因である。それは金融資本概念の確立を保証すると同時に、他方ではこの概念の確立によって逆に帝国主義認識の方法として明確化されていくという関係にある。比喩的に表現すれば、研究の出発点においてヒルファディングを越える要因でありながら互に関連づけられていなかった二本の座標軸が、出発点において不明確であった金融資本概念をレーニン独自の概念へと形成する過程を保証するとともに、確立されたこの概念を原点として交差するに至るのである。

〔註〕

- (1) 「国際社会主義者の統合の問題」(全集②, 183—4ページ。)および、「第二インターナショナルの崩壊」(全集②206ページ。)参照。
- (2) 「バルカンとペルシアの事件」(全集⑬)「狐とにわとり小屋について」, 「国会における労働者議員と彼らの声明の問題によせて」, 「カール・マルクスの学説の歴史的運命」(全集⑬)等を参照。のちに『帝国主義論』および「帝国主義と社会主義の分裂」(全集②)でレーニンが与えた帝国主義の定義(α . 独占資本主義, β . 寄生的なまたは腐朽しつつある資本主義, γ . 死滅しつつある資本主義)の区分に従っていえば、本稿は主として α について検討する。 β については、すでに「シュトウトガルトの国際社会主義者大会」(全集⑬ 69ページ)で、かなりの確な解明がなされている。
- (3) 「ヨーロッパ戦争における革命的社會民主主義派の任務」(全集② 3—4ページ)。
- (4) 「ロシア社会民主党在外支部会議」(全集②153ページ。)参照。
- (5) 〔注1〕の箇所を参照。
- (6) 『帝国主義論ノート』全集⑧86ページ, 参照。
- (7) 馬場宏二, 「『帝国主義論』のプラン」, 社会科学研究, 第21巻5, 6号, 1970年, 97

ページ、

- (8) 『帝国主義論ノート』は α から0までギリシア文字を付された15冊のノート——『帝国主義論』の執筆に利用されている——とその他6冊、計21冊のノートからなる。148冊の著書と232の論文からの抜粋、コメント、覚え書、帝国主義のプラン等々を含んでおり、大月版全集で700ページをこえる大冊である。各ノートには、日付が全く付されていないので、書きこみの時期は内容上の関連か、レーニンの論文への引用の日付によって判断するよりほかない。〔第1プラン〕が「崩壊」と同じ頃に書かれたと推定した根拠は、帝国主義把握の内容上の一致のほかに、〔第1プラン〕が、「カウツキーの帝国主義論」の項に記されていて「崩壊」が主としてカウツキー批判であること等である。なお『ノート』には全部で10にのぼるプランが記されているが、番号は付されていない。本稿では従来のプラン解釈に一致して、『ノート』に現われた順に通し番号をつけた。〔第1プラン〕の(5)は、邦訳ではツェントラリザーツィヤ＝集中、となっているが、『帝国主義論』の各邦訳書にしたがい、集積と訳しかえた。以下のプランでも同様である。その理由は、全集②440—1ページ、事項訳註225を参照。
- (9) 「第二インターナショナルの崩壊」全集②、225ページ。
- (10) Michael Barratt Brown, "ESSAYS ON IMPERIALISM," 1972, pp. 14—5. 参照。
- (11) 保護関税政策は、一方で大土地所有との同盟を保証し国家権力を支配する手段として、他方で世界市場競争を有利に展開するうえで有効な政策——第一に輸出奨励金によるダンピング輸出を可能にし、第二に資本輸出の推進への最強の刺激であり金融資本が膨脹政策を展開するうえでの不可欠のモメント——として位置づけられている。この点については『金融資本論』のほかに、R. Hilferding, „Der Funktionswechsel des Schutzzolls—Tendenz der modernen Handelspolitik“, (Die Neue Zeit, Jg. 21 (1902—03), Bd. 2, Nr. 35, S. 274—281) が参考になる。
- (12) 「第二インターナショナルの崩壊」全集②、222ページ。
- (13) R. Hilferding, „Das Finanzkapital“, Dietz Verlag, 1955, S. 1. 邦訳岩波文庫版(上)9ページ。
- (14) のちにレーニンはこの点について次のように述べている。「マルクス主義の見地からすれば、帝国主義を語りながら一国の情勢だけを論ずるのはばかっている。というのは資本主義国はたがいにきわめて緊密に結びついているからである。だが現在の戦争時には、この結びつきははかりしれないほど強まっている。」(「ロシア社会民主党(ボ)ペトログラード全市協議会」, 全集②、238ページ。)
- (15) 猪俣津南雄, 『帝国主義研究』, 昭和3年, 124ページ参照。

第二節．帝国主義認識の視角の確立

帝国主義研究はその後膨大な文献と統計資料との批判的検討の形で進められた。『帝国主義論ノート』はこの過程で生み出されている。しかし、1915年末以前の時期には、のちに再分割の必然性の論拠となる不均等発展法則の定式化⁽¹⁾等の成果はみられるものの、金融資本の概念規定は明確に与えられていないし、また世界の分割は大国のあいだでの世界の分割のみで捉えられ、国際カルテルはカウツキーの超帝国主義論への批判において言及されているにとどまる。

銀行資本を帝国主義の概念の出発点に位置する範疇とし独占体をその後で説く〔第1プラン〕の順序が、集積と大生産→独占→銀行→金融資本へと逆転しまた「国際トラストによる世界の分割」が植民地と並んで「世界の分割」の一項目に初めて取り込まれるのは、『帝国主義論ノート』の〔第2プラン〕においてである。第一の点は、金融資本の概念規定において、ヒルファディングの影響を克服しレーニン自身の独自の規定に到達したことを示している。第二の点は、帝国主義を国家と同盟した金融資本の領土膨張政策と同一視するヒルファディングを克服し得たことを意味している。「ノートβ」の末尾近くに記されている〔第2プラン〕を次に掲げよう。

〔第2プラン〕（全集^⑧165ページ）

帝国主義の問題によせて

テーマ：（たとえば）

5. 1. 金融資本.
4. 2. 銀行.
2. 3. カルテルとトラスト.
3. 独占.
1. 4. 集積と大生産.
6. 5. 資本輸出.
7. 6. 植民地. その意義.
8. 7. 植民地の歴史.
9. 8. 世界の分割.

国 際 ト ラ ス ト 植 民 地 カ ル ワ ー

- 10. 9. 自由競争対帝国主義.
- 11. 10. 自由競争に後退するか、あるいは帝国主義と資本主義の克服に前進するか？
- 12. 11. 超帝国主義あるいは国際帝国主義？
- ふたたび12. 成長の不均等性.
- 13. 12. ホブソン、カウツキー、帝国主義.
- 14. 13. 帝国主義の弁護論者と小ブルジョアの批判家.
- 15. 14. 帝国主義諸国における寄生性……（＜腐敗＞）（＜金利生活者国家＞）.
- 16. 15. 労働運動の最後の分裂……〔＜帝国主義と日和見主義＞〕.
- {17. 16. 1871—1914年の外交と対外政策.
- {18. 17. 帝国主義時代における民族問題.
- 19. 18. 絡みあい対＜社会化＞（リーサー参照）.

〔第2プラン〕では、金融資本の概念規定（その国内体制）——資本輸出——植民地の一般論——世界分割論——国際社会主義運動の理論的＝実践的観点からの諸論点（寄生性と腐朽化および小ブルジョア的、日和見主義的帝国主義論への批判等）——帝国主義の歴史的地位、という序列で、『帝国主義論』の各章の叙述項目がおおかた姿をあらわしている。掲げられていない項目は、金融寡頭制と第七章冒頭に位置する1～6章の総括であり、逆に植民地の一般論は『帝国主義論』においてはほぼ削除されることになる。各項目に二重に番号が付されているが、従来のプラン解釈に従って、右側の数字がもとの順序を、左側の数字があとからの変更を示すとみてよいだろう。つまりここには二つのプランが記されているのである。右側を〔2—A〕、左側を〔2—B〕とよべば、〔2—A〕から〔2—B〕への変更は、項目では、第一に超帝国主義論への批判であり再分割の必然性の論拠をなす成長の不均等性が、ふたたび12としてまた第二に独占が3に新たに加えられたことであり、構成上は金融資本の概念規定にさいして銀行から説き始める〔2—A〕の序列が、集積と大生産を出発点の範疇とする〔2—B〕へと転換している。

第四標識の取り込みについて述べておこう。国際トラストによる世界の経済的分割という現象は、20世紀に入ってようやく始まったばかりであった。帝國主義論の構築とは無縁な研究領域で産業と金融における新しい現象を追求していた少数のブルジョア学者——リーサー、ヤイデルス、リーフマン、フォーゲルシュタイン等——のみが、驚異の念をもってこの萌芽的現象を指摘していたにとどまるのである。この新しい現象を、政治的分割（植民地）と相並ぶ重要な位置づけを与えて帝國主義の経済的特徴づけのうちに取り込み得たこと、しかも帝國主義の研究が相当に進んだ段階で、金融資本概念の確立と関連してそれがなされたという事実⁽¹⁾に注意が払われねばならない。レーニン独自の金融資本概念の確立と世界の分割の独自の把握の成立——ここにわれわれはレーニンの帝國主義認識の独自の視角が形成されたことを読みとることができる。確立された金融資本概念の理論的意義から検討することにしよう。

生産の集積を出発点の範疇として措定し、そこから独占→銀行という序列で金融資本を説く構成がとられたのは、生産の集積こそ資本主義的蓄積過程の一般的傾向であり、この過程の論理的・歴史的継続として帝國主義の経済の本質である資本主義的独占が形成され、それが金融資本を生み出した根本的な要因であるという理解がレーニンの認識の基礎に置かれたからである⁽²⁾。ヒルファディングの金融資本規定との相違は、レーニンのこの理解にもとづく独占という契機の有無にのみ求めらるべきでなく、レーニンの帝國主義把握におけるその理論的意味にまで立入って考察されねばならない。

いうまでもなく、「支配と強制的関係」は資本主義的独占の本性をなす。産業独占が制約されざるをえない支配と強制的使用価値的制限を、銀行独占は貨幣という特殊の社会的力能の独占によって打破する⁽³⁾。資本主義的独占の発展は、一方で一国的規模における少数の大金融資本の全能すなわち金融寡頭制⁽⁴⁾の形成へ導き、他方で資本輸出を主要な媒介として世界的規模での金融資本の支配構造を形成するに至る。金融資本の概念規定に独占が基礎的範疇として据えられた理論的意味を、われわれは、独占の本性である「支配と強制的関係」

が、一国的な規模でも世界的な規模でも、ひと握りの大金融資本の支配構造を形成せざるを得ないという認識にまでレーニンが深化させた点に見出す。ヒルファディングは、「その完成における金融資本は、資本寡頭制の手中における経済的および政治的絶対権力の最高段階を意味する。それは資本貴族の独裁を完成する⁽⁵⁾。」と正しく指摘していながら、この認識を「ブルジョア社会の諸大階級の政策⁽⁶⁾」の分析に局限し、そのために世界経済的規模で形成されている金融資本の支配構造を認識することができなかった。「古典的国民経済学」の視角を脱脚しえなかったヒルファディングの限界と、世界経済的視角によってそれを克服したレーニンの帝国主義認識の優越性をわれわれはここに見る。レーニンはそれを次のように簡潔に表現している。

「典型的なものとなったのは、もはや、自由に競争する——国内で、また諸国間の関係で、——企業ではなく、企業家の独占団体、トラストであった。世界の典型的な「支配者」となったのは、すでに金融資本であった。この金融資本は、とくに可動的で柔軟性があり、一国でも国際的にもとくに絡みあっており、とくに無性格的であり、直接的生産から切り離されており、とくに集積されやすく、しかもすでにとくにはなほだしく集積されているので、文字どおり数百人の億万長者や百万長者が全世界の運命をその手ににぎっているのである。」(強調点はレーニン)。⁽⁷⁾

経済的独占の本性である「支配と強制の関係」が展開して形成する世界的な規模における金融資本の支配の体系——それが帝国主義である、というレーニンの認識が明確に表現されているのは〔第3プラン〕である。

〔第3プラン〕(全集^⑨, 166ページ、)

帝国主義の概念の機成部分

たとえば：

1. I. 集積の帰結としての独占
2. II. 資本輸出(主要なものとしての)
4. III. {世界の分割 { (α) 国際資本の協定
5. IV. { (β) 植民地
3. V. 銀行資本とその<糸>
6. VI. 自由貿易と平和的取引の暴力政策との交替(関税; 略奪等々)

〔第3プラン〕も2つのプランを含む。独占から直ちに資本輸出を説く点は共通しているが、〔3—A〕では、世界的規模における独占の主要な現象形態である世界の分割、すなわち（ α ）と（ β ）が先ず位置し、銀行資本とその〈糸〉がこれらの後に説かれているのに対して、〔3—B〕では、それが資本輸出の後に位置している。〔第3プラン〕は〔第2プラン〕の直ぐ後に書かれているから、レーニンにはすでに上述の金融資本概念は獲得されている。〔第3プラン〕はしたがって、引用文にも示されているように、銀行資本を独占の世界支配体制のなかで説き、ひと握りの大金融資本が世界の支配者となり、全世界の運命をその手に握っている、というレーニンの帝国主義の認識が示されていると考えるべきであろう。金融資本は世界金融資本として説かれているわけである。戦争の階級的内容の証明を支配階級の客観的立場の分析によって示す⁽⁸⁾というレーニンの目的を、このプランは端的に表現している。

以上の検討によって、「国際トラストによる世界の分割」（〔第2プラン〕）、あるいは「国際資本の協定」（〔第3プラン〕）が、帝国主義の特徴づけに取り込まれた理由も明らかになる。帝国主義の経済的本質である独占の世界的規模における主要な二つの現象形態は、「国際トラストによる世界の分割」と植民地の独占的領有であるが、後者だけが金融資本の世界支配の形態なのではない。むしろ「国際トラストによる世界の分割」のほうが、金融資本に固有の経済的および金融上の力にもとづく支配と強制の関係の世界的規模での発現であり、上部構造的諸要因に規定されない金融資本の本来的な活動形態をなすのである。その意味で、「国際トラストによる世界の分割」は植民地に先行して説かれねばならないし⁽⁹⁾、いうまでもなく第五標識に比べて軽視さるべきではないのである。「列強のあいだでの世界の分割（植民地）」が不可避免的に国家的＝暴力的諸手段をつうじる他民族の搾取と抑圧を伴い、その要因が20世紀より以前の帝国主義との共通の特徴である⁽¹⁰⁾にしても、「国際トラストによる世界の分割」はその特徴をもって説明することはできない。レーニンの帝国主義認識の視角は、したがって帝国主義を国家的手段による他民族の抑圧とのみ見てい

るのではなく、ヒルファディングのように金融資本の領土膨張政策と同一視しているのでもないことになる。第四標識と第五標識を貫徹する特質は、金融資本の世界分割支配ということである。

以上に検討してきたところから明らかなように、生産の集積と独占を基礎に据えたレーニン独自の金融資本概念は、彼の世界経済的視角と相まって、独自の帝国主義認識を生み出した。われわれはそれを、＜金融資本の世界分割支配の体系としての帝国主義＞といい表わすことができる。これが膨大な文献と統計資料との批判的研究をつうじてレーニンが獲得した20世紀の資本主義的帝国主義の本質的把握であり、帝国主義を単に国家的手段による他民族抑圧や金融資本の領土膨張政策と同一視する従来の多くの見解——レーニン『帝国主義論』の解釈すらほとんどは第四標識を無視または軽視することによって、この見解にくみしている——とは峻別されねばならない根本的に重要な一点をなすのである。

〔註〕

- (1) 「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」, 全集②, 352ページ参照。
- (2) この理解は、「エヌ・ブハーリンの小冊子『世界経済と帝国主義』の序文」, 全集②, 114ページにすでに明確に述べられている。なおこの論文は、自由競争にかわって独占が現れはじめた時期を19世紀と20世紀の境目とはじめて明記した点でも注目されねばならない。
- (3) 生川栄治, 『イギリス金融資本の成立』, 1956年, 4—5ページ参照。
- (4) 〔第2プラン〕が書かれた時点ですでに金融寡頭制の概念は獲得されている。『帝国主義論ノート』, 全集⑧160ページ参照。この点には次節でも触れる。
- (5) R. Hilferding, a. a. O. S. 561—2. 岩波文庫版(下) 183ページ。
- (6) I bid., S. 3, 岩波文庫版(上) 11ページ。
- (7) 「エヌ, ブハーリンの小冊子『世界経済と帝国主義』の序文」, 全集②114ページ。
- (8) 『帝国主義論』, 全集②218ページ。
- (9) 党綱領改正にさいして、レーニンは、領土的分割の完了を第四標識、国際トラストによる世界の分割を第五標識と逆の順序でよんでいる。それは領土的分割が完了した段階で国際トラストによる分割が始まったという関連を重視しているためである。(『党綱領の改正によせて』, 全集⑩161—3ページ。) この順序は「党綱領改正資料」(全集④446ページ)及び「ロシア共産党(ボ)綱領草案」(全集⑧88—9ページ)

でも保持されている。

- (10) 「ナポレオンの帝国主義」(『ユニウスの小冊子』, 全集②358ページ) および「帝国主義戦争もまた奴隷制を基礎としても(ローマとカルタゴの戦争は、どちらのかわについてみても帝国主義戦争であった), 中世にも, 商業資本主義の時代にもおこった」(『党綱領の改正によせて』, 全集④157ページ) というレーニンの指摘を参照のこと。レーニンが究明の対象としているのは帝国主義一般ではなく, 20世紀の資本主義的帝国主義の特質なのである。

第三節. 帝国主義認識の視角と段階認識

本節では, 帝国主義を資本主義の特殊の段階と捉えるレーニンの段階認識が帝国主義認識の視角の確立過程とどのような関連において獲得されたか, 視角と段階認識とはどのような関係にあるかを明らかにする。わが国の『帝国主義論』研究においては, 段階認識の根拠が多くのはあい独占資本主義に求められているために, マルクス主義者の間に多くの混乱を生んできているので, この点には再検討がなされねばならないと考えているからである。

すでに第一節で若干触れたように, レーニンが初めて帝国主義の時代を資本主義の最高の発展段階である, と述べたのは, 15年2月の「よその旗をかかげて」においてである。そこでレーニンが採用した時代区分は, (1)1789年(フランス革命)——1871年(普仏戦争, パリ・コミュン): 戦争と革命の時代, 封建的=絶対主義的諸制度の崩壊とブルジョアジーの興隆の時代, (2)1871—1914年: 「平和な」資本主義の時代⁽¹⁾, ブルジョアジーの完全な支配と衰退の時代, プロレタリアートの勢力結集の時代, (3)1914年(帝国主義戦争) — ? : 帝国主義の時代, 再び戦争と革命の時代, である⁽²⁾。この時代区分は, 20世紀初頭を帝国主義段階への画期と捉えた『帝国主義論』の段階区分と異っている。それは, 区分の基準が異っているからである。『帝国主義論』では世界経済の諸条件が画期の基準とされているが, 叙上の時代区分では次のような基準が採用されているのである。区分の基本は戦争と革命の有無であり, この基礎の上に「どの階級が, あれこれの時代を中心に立ち, その時代の主要な内容, その時

代の発展の主要な方向、その時代の歴史的情勢の重要な特殊性、等々を規定するか⁽³⁾」を基準に、「とくに顕著な、めだった歴史的事件⁽⁴⁾」が道標として選ばれているのである。帝国主義戦争を祖国擁護＝防衛戦争とか民族解放戦争と言いつくろうとする日和見主義者や社会排外主義者のデマゴギーを暴露し、帝国主義戦争の階級的な性格を明らかにするために、あるいは民族自決権の問題を論じるさいに、レーニンはこの時代区分を繰り返し使用している。

帝国主義の本格的な研究に先立ってレーニンがこの区分をなした事実が示しているように、この時代区分は帝国主義の経済的根柢の解明なしには不可能という性格のものではない。それは唯物史観の革命運動や労働運動への適用によってなされるのであって、レーニン独自のものではなく当時のマルクス主義文献では通例の時代区分であった⁽⁵⁾。

上述の時代区分と区別する意味で、20世紀初頭を画期とする『帝国主義論』における区分を段階区分とよぶことにしよう。区分の基準が異なるから両者は相互に排斥する関係にないことはいうまでもない。第一節末尾で明らかにしたようにレーニンには帝国主義の時代への移行の根本的な原因を明確にしようとする強烈な志向があった。「第二インターナショナルの崩壊」においては、独占と領土的分割完了の二要因を時代移行の根本原因として捉えているが、移行期は1914年と考えられている。15年7—8月執筆の「社会主義と戦争」においては、『帝国主義論』第六章のズーパンとヒューブナーとによる世界の領土的分割の表と同じ表⁽⁶⁾が掲げられているにもかかわらず、やはり時代区分に従っている。20世紀初頭を画期にとる段階区分が初めて現われるのは、15年12月「エヌ・ブハーリンの小冊子『世界経済と帝国主義』の序文」においてである。

「交換の一定の発展段階で、大規模生産の一定の発展段階で、すなわち、ほぼ19世紀と20世紀の境目で到達された段階で、交換は、経済関係を大いに国際化し、資本を国際化し、大規模生産は非常に大規模なものになったので、自由競争にかわって独占が現れはじめたのである。典型的なものとなったのは、もはや、自由に競争する——国内で、また諸国間の関係で——企業ではなく、企業家の独占団体、トラストであった。世界の典型的な「支配者」となったのは、すでに金融資本であった⁽⁷⁾。」

前節で考察したように、この引用文は金融資本の世界支配体制として帝國主義を捉えるレーニンの視角を簡潔に表現している。そのみならず、「エヌ・ブハーリンの小冊子『世界經濟と帝國主義』の序文」では、大国のあいだでの領土的分割においてのみ世界の分割を捉えていたそれ以前の諸論文と異なり、國家權力を媒介とすることなく、金融資本そのものが世界を支配しているという認識が示された点にその主要な特徴の一つを見出しうる。ここにわれわれは、レーニンの独自の視角と段階認識との確立が相関連していることを看取しうる。両者の関連を解明するための資料として、レーニンが〔第2プラン〕の数ページ前に書き残している「金融資本一般に関する覚え書」を指摘したい。「覚え書」では6つの点にわたって金融資本とその意義について述べたあとで次のような〔総括〕が示されている。

「ΣΣ=金融資本（独占体，銀行，寡頭制，買収，等）は，資本主義の偶然なぜい肉ではなくて，資本主義の不可避的な継続であり，産物である……植民地だけでなく，(a)資本輸出，(b)独占体，(c)結びつきと従属關係の金融的な網の目，(d)銀行の全能，(e)利権と買収，等々もまた，そうである(8)。」

〔総括〕の前半部分は金融資本概念の内容をなす諸範疇——それは同時に金融資本の一國的規模での支配体制の確立をいい表わしている——を明らかにし後半は金融資本の世界支配の諸形態と諸手段とを明らかにしており，それらが資本主義の不可避的な継続であり産物である，と捉えられている。ここでは後半部分の解釈を先ず与えておこう。(a)は金融資本の一國的規模での支配と世界支配との主要な媒介である。(b)独占体は，國際的独占体とそれによる世界の分割支配を指している。(c)は金融資本や諸資本間の結びつきと従属の關係を指していると考えられる。これらの關係は金融資本に固有の金融的な網の目によって結ばれている。(d)は國際的銀行シンディケート等々に示される銀行の世界經濟支配を示している(9)。〔第3プラン〕が想起されてよい。(e)は國家的手段によらない金融資本の世界支配の手段である。國家的手段をつうじる植民地支配のみではなく，それ以外の(a)～(e)にわたる金融資本に固有の諸手段による世界支配もまた資本主義の不可避的な産物なのである。この意味において，金融資本

の世界支配は複合的な構造をなしているということができる。

レーニンが「金融資本一般」に与えたこの特徴づけは、第五標識のみを重視していた従来の解釈の一面性への批判であり、われわれが明らかにしたレーニンの視角の理解の正当性を証明している。この点がレーニンの段階認識にも関わってくるのである。帝国主義は政策ではなく資本主義の特殊な段階であるということの意味は、レーニンが〔総括〕で与えたように総体的に把握されねばならない。ヒルファディングが帝国主義を領土膨脹政策と捉えたのは、金融資本が国家を支配し、国家政策として領土膨脹を推進したからであり、その限りで妥当な把握ということができる。レーニンの帝国主義認識は、すでに明らかにしたようにそれとは異なっている。先進資本主義諸国でカルテルが全経済生活の基礎の一つとなり、銀行と産業の新しい関係が恒常化し、金融寡頭制が確立する過程は、同時に資本輸出が増大し金融上の力をもつ少数の国家が世界経済において傑出する過程である。それは同時にまた、列強による領土的分割だけでなく、(a)～(e)の諸形態による金融資本の世界支配が資本主義の不可避的な産物として確立する過程である。これら産業資本主義の段階には全く存在しなかったかまたは支配的ではなかった諸関係が、世界経済において典型的となり一般的な体系となった段階、一言でいえば金融資本の世界分割支配の体系が確立した段階こそ資本主義の特殊の段階なのである。20世紀初頭が帝国主義段階への転化の画期であるという指摘は、『帝国主義論』第1～6章でそれぞれの主題との関連で現われているが、それらは各々孤立的にではなく、上述の意味で総体的に把握されねばならない。レーニンのこの認識においては、帝国主義が政策とみなされることはありえない。

わが国の帝国主義研究においては、レーニンの段階認識に高い評価が与えられているにもかかわらず、段階認識の根拠は、金融資本の世界分割支配の体系の確立にではなく、独占資本主義に求められてきた。帝国主義認識に関わるこの重要な点の誤解が現代世界経済分析にも多くの混乱をもたらしているのであるから、立ち入って論じねばならない。

レーニンは『帝国主義論』第七章で、「帝国主義のできるだけ 簡単な定義」として、「帝国主義とは資本主義の独占的段階である⁽¹⁰⁾」と述べている。レーニンはそのすぐあとで、この定義では不十分であるとして周知の五つの標識を与えているのであるが、その点が無視されて、帝国主義＝独占資本主義という不十分な定義が一般に受け入れられる結果になってしまったのである。富塚文太郎氏はそれを次のように明らかにしている。

「帝国主義＝独占資本主義という等式は、後代のレーニン主義者たちを金縛りにした。……現在では、独占資本主義＝帝国主義＝帝同主義的対立という等式が、資本の国際的融合の軽視をもたらし、多くのマルクス主義者の情勢分析を誤らせている⁽¹¹⁾。」

この指摘は、第五標識のみを重視し、そのことによって帝国主義国の国家対立を分析の軸にすえてきたわが国の「多くのマルクス主義者」の限界を鋭くついている。しかしながら、富塚氏はこの限界の原因を、独占資本主義＝帝国主義というわが国の『帝国主義論』研究の不十分性に求めるのではなく、レーニンの規定そのものに求め、ついにレーニンの段階認識を拒否するに至っている⁽¹²⁾。

段階認識の根拠を独占資本主義に求める理解を一貫させると、レーニンの段階認識といかに背離するかを明らかにするために、宇野弘蔵氏の見解を取り上げることにしよう。宇野氏は、レーニンが『帝国主義論』を段階の理論として叙述したことがこの著書を明快なものにしているのであり、そのことは『資本論』の理論的規定を混入させた『金融資本論』と比較すれば直ちに明らかになると、レーニンの段階認識を評価する⁽¹³⁾。しかしながら、宇野氏の段階認識の理論的根拠は、レーニンとは異なり、独占資本主義におかれている。すなわち、独占の成立——具体的には「株式会社制度を基礎とする金融資本の形成」⁽¹⁴⁾——によって価値法則の純粋な貫徹が保証されなくなること、同じことであるが、資本主義的純化の傾向が阻害されること⁽¹⁵⁾、ここにもはや原理論では解明しえない新たな「段階」の根拠が求められている。周知のようにヨーロッパとりわけ宇野氏の「典型国」であるドイツにおいて独占が広汎に形成され

ようになるのは1870年代以降である。宇野氏は自らの段階認識の根拠にもとづいて、70年代以後を「資本主義の世界史的発展段階に特殊の段階を画する」⁽¹⁶⁾と規定しているのである。独占資本主義の成立に段階の根拠を求めるならば宇野氏に従って70年代を画期とせざるをえない。しかしレーニンは、70年代以降独占が広汎に普及していることを十分承知していながら、独自の帝国主義認識を根拠にして20世紀初頭に画期を求めているのである。70年代と20世紀初頭という画期の選択に、宇野氏のいわば国民経済的視角とレーニンの世界経済的視角との背離が鋭く示されている。

同じく独占資本主義を段階認識の根拠にしていながら、それを世界経済との関連において把握したのがクチンスキーである。彼は世界経済の第二期として1871—1917/18年を区分している⁽¹⁷⁾。この時期の経済的特徴は、「単一国家の支配を伴わない独占資本の支配する世界経済の形成」⁽¹⁸⁾である。クチンスキーによればこの時期は二つの小期に分かれる。第一小期（1871—1900年）は「独占資本主義的発展の初期」、第二小期（1900—1917/18年）は「世界経済における独占資本の支配」⁽¹⁹⁾をもって特徴づけられる。一見して明かなように第二期全体の特徴づけと第一小期の特徴づけとはなじまない。独占資本主義の発展の初期に独占の世界経済支配を語ることに無理があるからである。

独占資本主義は帝国主義の経済的本質であるから、帝国主義を資本主義の独占的段階と捉えるのは誤りとはいえない。しかしそこにとどまる限りなお不十分なのである。のみならず、富塚氏に批判された「マルクス主義者」のように図式的な帝国主義理解に陥って情勢分析を誤ったり、富塚氏のように帝国主義を特殊の段階と捉える認識そのものを否定することになったり、あるいは宇野氏のようにレーニンとは異なる帝国主義認識に導かれたりすることになるのである。経済的本質たる独占資本主義が発展してその主要な五つの形態が典型的となった段階、国内的諸関係もさることながら、列強のあいだでの領土的分割が完了し、国際的独占体のあいだでの世界の分割が始まった20世紀初頭をもって、レーニンは世界経済における金融資本の支配の体系が確立した、と捉えた

のである。クチンスキーの区分では、第二小期をもって世界経済の画期とせねばならない。

〔註〕

- (1) レーニンが「平和な」資本主義と特徴づけたのは、ヨーロッパに戦争がなかったという意味である。この時代区分はヨーロッパ史を視野においてなされているのである。吉信庸氏は、この点を誤解して、「平和的拡張とあえて性格づけたところにレーニンの鋭い着眼点があった」（『新マルクス経済学講座』第二巻、1972年、185ページ）と述べている。だが、レーニンは、「平和な」資本主義とは言ったが、「平和的」拡張とは一言も言っていない。逆に、「植民地や後進国の数万の住民にとっては……『平和』ではなく、抑圧、苦悩、恐怖」であったと述べているのである。（集全⑩113—4ページ。）植民地や後進国では、「最新式の大量殺傷兵器を装備したヨーロッパとアメリカの帝国主義の軍隊が、植民地諸国の武器を持たない、無防備の住民を皆殺しにするという、屠殺に終ることがしばしばあったので、戦争とは見なされなかった多くの戦争」（『共産主義インタナショナル第二回大会』、全集⑩、208ページ、）が行われたからである（平和に括弧が付けられているのもそのためである）。帝国主義段階以前の資本主義を平和的とみなす見解はこの点を忘れていのである。
- (2) 「よその旗をかかげて」、全集⑩、138—9ページ。
- (3) 同、全集⑩、138ページ。
- (4) 同、全集⑩、139ページ。
- (5) 同、全集⑩、139ページ参照、ローザ・ルクセンブルグも、パリ・コミューンの墳墓はヨーロッパ労働運動の段階を画し、以後一つの新しい段階が始まった、と述べている。（『社会民主党の危機』、1915年執筆、1916年発行、現代思潮社版選集、第三巻、152—3ページ参照。）ついであるが、1913年には、レーニンは第二の時代を1904年までとし、1905年ロシア革命以降を第三の時代に区分している。ここにも経済的諸条件を基礎にしない時代区分の性格が示されている。（『カール・マルクスの学説の運命』、全集⑩、627ページ参照。）
- (6) 「社会主義と戦争」、全集⑩309ページおよび『帝国主義論』、全集⑩298ページ。
- (7) 全集⑩114ページ。
- (8) 『帝国主義論ノート』、全集⑩160ページ。
- (9) たとえば、N. ブハーリン、前掲書、邦訳77ページを参照のこと。
- (10) 『帝国主義論』、全集⑩、307ページ。
- (11) 富塚文太郎、前掲論文、48ページ。
- (12) 「近世以降の帝国主義の根本特徴は、それが歴史的にいちだんと進歩した社会形態——資本主義——を基礎にした民族による、よりおくれた社会形態の民族に対する支配、という点にあった。」（同論文、47ページ）すなわち帝国主義は特殊の段階ではない、ということになる。資本主義民族のおくれた民族に対する支配は資本主

義の全時代をつうじてみうけられるからである。富塚氏は「資本の国際的融合」を強調し、しかもレーニンの論文から「資本の国際化傾向」を指摘している箇所を引用しているにもかかわらず、『帝国主義論』の「資本家団体のあいだでの世界の分割」を無視している。そのためにレーニンの視角を正しく理解しえず、専ら第五標識にのみ注意を向けるとともに、帝国主義＝独占資本主義の図式をレーニンの帝国主義認識と誤解することになってしまっている。この点では富塚氏は氏の批判する「レーニン主義者」と誤りを共有しており、そのことが『帝国主義論』の放棄に導いているように思われる。

(13) 宇野弘蔵、「帝国主義の方法について」、『『資本論』と社会主義』，1958年，201ページ参照。

(14) 宇野弘蔵、『経済学方法論』，1962年，47ページ。

(15) 宇野弘蔵，同書，43—56ページ参照。

(16) 宇野弘蔵、『経済政策論』，1954年，131ページ。しかし宇野氏はドイツ関税政策史を詳細に追跡し、1902年のビュローの関税改正をもってはじめて「帝国主義関税」と呼び、イギリスの帝国主義化の根拠をドイツのこの帝国主義的傾向への対応から説明することによって、レーニンとは異なった視角からではあるが、20世紀初頭を画期に求める規定を尊重しているように思われる。(同書209—215ページ参照)。したがって、『『資本の輸出が巨大な発展をとげた』のか20世紀に入ってからであるのに、すでに『19世紀と20世紀との境で世界の分割が『完了した』』ということに問題があるのです」(宇野弘蔵、「帝国主義論の方法について」，前掲書，217ページ)と正しい指摘をなすことも可能とされているのである。しかし、宇野氏のエビゴーン達は、70年代の大不況を画期にとるのに何の疑問も感じていない。(たとえば大内力編、『現代資本主義の運命』，1972年，13ページ参照)。これは宇野理論の純化であるとともに、単純化である。大不況を画期に求める理解を支持するかにみえるもう一つの事情は、イギリス、フランス等の対外領土膨脹の昂進がこの時期に始まっていることである。しかし、これを画期の根拠に求めることは、帝国主義を国家的＝暴力的手段にもとづく膨脹政策あるいは弱小民族の抑圧とみなす通俗的理解に後退することになる。

(17) ユルゲン・クチンスキー、『世界経済史』，1952年，加藤，二見共訳，21ページ。クチンスキーの区分は、世界経済の第一期(1789—1871年)，第二期(1871—1917/18年)，第三期(1918—?)である。1914年が17/18年に修正されているが、この区分は先に掲げたレーニンの時代区分に照応している。区分の基準からいって、世界経済に適用することには問題があることは明らかであろう。クチンスキーはそのため、経済的特徴づけによってこの区分を正当しようとしているのである。

(18) クチンスキー，同書21ページ。

(19) 同上。

小 括

『帝国主義論』の成立過程の追求によって明らかにしたように、レーニンは〈金融資本の世界分割支配の体系〉として帝国主義を捉えているのである。この視角の確立過程を解明することによって、一般に受けいられている帝国主義を金融資本の植民地支配と捉える見解は、レーニンが研究の出発点で依拠したヒルファディングの帝国主義認識の水準にとどまっていることを明らかにしえたと考える。またレーニンの段階認識の根拠がこの〈視角〉にほかならないことを明らかにし、段階の画期との関連を追求することによって、マルクス派の現代帝国主義分析を一国的分析へと誤まり導いている帝国主義＝独占資本主義という単純化された帝国主義理解を批判するとともに、他方で上の図式が現代世界経済の諸現象の解明に有効でないという理由で『帝国主義論』を放棄する傾向をも批判したつもりである。

まえがきで述べたように、この〈視角〉が『帝国主義論』でいかに展開され現代世界経済分析の視角と方法にどのような意義をもっているかが明らかにされねばならないし、またわが国でなお方法や概念構成において混乱のみられる『金融資本論』と『帝国主義論』との理論的関連が解明されねばならない。このことはまたわが国の帝国主義研究の二大潮流の批判へと進まざるをえないことを意味している。第三節で部分的に言及した宇野氏の「段階論」の理論的性格の解明と批判、経済学批判体系に『帝国主義論』を組み入れようとする潮流の批判が果されなければならない。本稿の研究を基礎に、次稿「レーニン『帝国主義論』の世界経済的視角の意義」はこれらの課題を取り扱う。